



加藤 元の



と暮らして
みませんか

47

昨年四月に始まった連載も終わりに近づいてきました。最後に三回にわたり、「人と動物との絆」ヒューマン・アニマル・ボンド、HAB)の大切さが指摘されるようになってきた過程を振り返りながら、「命の教育」をするための「ペットと暮らす意味」について触れたいと思います。

皆さんご存知の通り、二十世紀に入り、世界では先進国の工業化に伴う大都市化が進みました。工業、商業だけでなく、教育や医療、福祉、その他あらゆるサービス業も拡大し、多大な労働人口の大都市集中が起こりました。

そして第一次、第二次世界大戦、その後の復興を経て、世界各国の大都市化と機械・工業・重化学工業社会化は、一層のはずみ

命の教育上

求められる「ふれあい」

は拡大し、高学歴社会なども進み、また核家族化や少子化、高齢化が起こり、生活習慣病などの文明病も広がりました。

このような歴史のなかで、大都市を中心に、「人と人、人と動物、人と自然とのふれあい」が次第に希薄化し、それに伴い、子供たちが命の大切さや社会のルール、思いやりの気持ちなどを体感・体得できないまま大人になり、そして子供を産み育てるといった悪循環を招くようになりました。

それにより、大人社会ではモラルの喪失と残虐性が増し、それが子供にも反映し、動物や仲間に対するいじめや虐待、万引、自傷、不登校、校内外・家庭内外の暴力などという形で表れ、エスカレーターしていきます。また、「しつけ」という名のもと、子供への虐待が行われ、特に日本では「子供は親のもの」という親のエゴにより、子供たちに対する暴力が、ひどくなっています。

今、世界的に大都市でも犬や猫と暮らす人々が増えているのは、HABの大切さに気付き、命と心の「ふれあい」を求めているからです。

(ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長)

《産経新聞2005年3月13日掲載》